

層雲揭載句

(一九八一年九月～一九八二年七月)

宇宙始まるときのふうせんを　誰が吹いたか

風を葉に春翻る　城

海暮るる　死者の齡石に刻まれ

ダリアのような月をぶら下げて　町が夕餉時

ビルをシルエットに　陽がぼよよと沈む

電気つけっぱなしの　ひげのまばらな口である

地球儀カラカラまわして　真白い秋になっている

礎石冷たく 城はるかに滅ぶ

何という顔だ 地球が消える

山を人を焼きつくしたあとの 鐘が鳴る

まっすぐに歩いてきた筈の 砂丘

雪降る海峡に 朝鮮放送が刻を告げている

空に 十一月の鳥がこぼれている

冬の月を 背中に凍らせる

秋天の　どこかに霧が生まれつつある

化野を風が下りてくる　道のうねりに沿うて

化野暮れて　間断なく落ちてくる雪

雨のなか　あてもないひざががくがく酔うている

今日が明日に　マグマふつつたぎる腹見せず

椅子乱立する部屋に　時のない夜がはじまる

十字架を連ね海の下　街が影絵になる

貧しい腕からも　ひとり分の血をさしあげる

採られたばかりの血潮　朝の日にインクのように透ける

大動脈弁閉鎖不全症　魚のような青い息吐く

直立二足歩行霊長類ヒト　進化図にあとがない

どこまでも真っ青の空　ヒロシマ真下に今もある

破れた月が　ビルのどの窓にも貼られている

まぶたのうらにも光が見える　春になっている

春朝　いきなり水路工事のクレーンの喧噪で始まる

素通りしようとした　とある町にうどんすすつている

なんのことはない　春逝くペースで雲が焚かれる

春逝く　鐘の音ひとつ手のひらにのせ

鐘の余韻のなか　夕日ついと落ちていく

曇吹き降る脇道を抜け　傘ばさばさと打つ※

干し柿吊してあり　入院中と聞きし軒端に※　※は層雲掲載なし